

副詞「まさか」をめぐって

李 知 殷

一 はじめに

現代日本語の「まさか」について、『現代副詞用法辞典』（二〇〇四・四八七）には「可能性が非常に低いという判断を表し、後ろに打消しや否定の表現を伴う述語にかかわる修飾語になることが多い」と記述し、次のような例をあげている。

(一) こんなきれいな夕焼けならまさか雨もないもんだ。

(二) まさか春子が一位になるとは思ってもいなかった。

(一) は夕焼けをみて雨が降る可能性が低いと判断する、(二) は「春子が一位になる」ということは想定外のことと、これまで考えたことがなかったのに「春子は一位になった」という意味である。

『日本語文型辞典』（一九九八・五三二六）にも「文末に否定表現を伴って、そんなことは実際には起こらない、そんなはずはな

いと打ち消す気持ちを表す」と定義しており、次のような例をあげている。

(三) 彼には何度も念を押ししておいたから、まさか遅れることはないだろう。

(三) は彼が遅れないよう注意しておいたので、「遅れる」は「まさか」という、そうなる可能性が低いことを意味する。

「まさか」文末表現との関係においては、(一) (二) は否定表現（「ない」「とは思わなかった」）、(三) は否定推量表現（「ないだろう」と呼応関係を持つている。特に(二)の「思わなかった」は想定外の意を表す。

以上、現代語における「まさか」は主に副詞として「ある事柄について、文末表現と呼応関係をもちつつその可能性を否定・否定推量する」または「想定外」の意味をもつとまとめられる。

ところが、歴史的過程をみてみると、ごく一部ではあるものの、現代語の「まさか」と違って、文末に断定表現がくるものがある。

「まさか」に助詞「に」が付いた形であるが、断定文に使われている。(以下『日本古典文学大系』(岩波書店)を「大系」と略す)

(四) 初瀬路「サアずいぶんむりとはおもひ、せんが、一トえさ
んもあのよふにいゝすから。」文里「ありやア三年もこふ
来たものだから、**まさか**にあいそうぶりだわな。」よしの
「なんでもわたくしどもが、一生のたのみざんす。」

『傾城買二筋道』(大系・一七九八年頃)

このようなことから、本稿では、歴史的観点を視野に入れ、「まさか」の歴史的变化過程をみていく。主に初めて現れてからどのようにして副詞的な性質を獲得し、どのような変化過程を経て現在のように、否定・否定推量表現と呼応関係をもつようになったのかについて考察する。

以上のことを踏まえて、二節では「まさか」の初出及びその流れを確認し、三節では「まさか」の歴史的变化過程を追い、最後の四節でまとめることにする。

二 「まさか」の初出及びその流れ

「まさか」の初出は八世紀後頃の『万葉集』である。左の全例の「まさか」は『万葉集』からのもので、万葉仮名表記(「真坂」「麻左香」「麻左可」)がされている。今回は『新編日本古典文学全集』(小学館、以下『新全集』と略す)の『万葉集』を参考に例をあげることにする。

(五) 梓弓末はし知らず然れども**まさか**(真坂)は君に寄りにしものを(285)

(六) しらかつく木綿は花物言こそば何時の**まさか**(麻左可)も常忘れえね(296)

(七) 我が恋は**まさか**(麻左可)もかなし草枕多胡の入野の奥もかなしも(343)

(八) 伊香保ろの沿ひの榛原ねもころに奥をなかねそ**まさか**(麻左可)し良かば(341)

(九) 梓弓末は寄り寝むの**まさか**(麻左可)こそ人目を多み汝を端に置けれ(349)

(一〇) さ百合花ゆりも逢はむと思へこそ今の**まさか**(真坂)も愛しみすれ(488)

『新全集』には(五)は「いかなる時」、(六)～(一〇)は「今の時」というふうな語釈される。これについて『日本国語大辞典第二版』(二〇〇二、以下『日国』と略す)の説明を借りると「目前の時。さしあたって今。まさに今。現在。当座」という意味で、名詞として扱っている。つまり、「まさか」の初出当初は「今・現在」といった意味をもち、場合によって「どんな時」といった不定の時期を表すとされる。

中世には例がなく、現代語の「まさかのN」という形と同様なものが現れたのは近世に入ってからである。

(一一) まさかの役にたたず

『浮世草子・忠孝永代記』(日国・一七〇四年頃)

また、現代語での主な用法である副詞的用法は中世以前の資料からは一件も見当たらず、近世になってから用いられるようになる。これについて『日国』の「まさか」の項目にも「中世の文献には用例を見ず、副詞用法の確例は近世に入ってから認められる」というような記述がある。

(一) 是でなければ**まさか**人は斬れぬ

『歌舞伎・幼稚子敵討』二(大系・一七五三年頃)

「まさか」は名詞として古代から現れはじめ、時代の流れとともにその姿が見えなくなった時期もあったが、再び現れた時には意味用法面に変化があった。

ここまでおおまかに「まさか」の初出及び流れをみてきたが、次節では「まさか」の歴史的变化過程を具体的に述べることにする。

三 「まさか」の歴史的变化過程

前述したように、「まさか」の初出は中古であり、名詞的なものであった。近世には多様な形態とともに新用法が見える。名詞的なものとしての「まさかの+N」形や、「まさか+」に「まさかφ」といった副詞的なものが初めて見える。近代に入ってから「まさかφ」の用例数が飛躍的に増加し、現代にまで使われ続けている^①。

以上、本節では近世・近代を中心に歴史の変遷を考察する。

研究資料は『日本古典文学大系』(岩波書店)、『新編日本古典文学全集』(小学館)、『歴史コーパス』(国立国語研究所)のほか、コーパス類・辞典類・索引類を用いる。考察する際、抽出される範囲の「まさか」のみを対象にする。(詳細な資料は稿末【参考文献】を参照されたい)

三・一 近世期

本稿の研究対象となる近世の資料を調査した結果、「まさか」の用例数は少数であるが、劇文学に偏ってみられる。八世紀、初期の「まさか」が特定の作品にしか現れなかったことからみると、近世の「まさか」は使われる範囲が広がった。

形態面においては「まさかの+N(≡名詞)」形(二三例)、「まさかに」形(二例)、「まさかφ」形(七例)に分けられる。

この三つの形態は『江戸語大辞典』(二〇〇三・九三二)にも同じく捉えられていて、これらに基づいてみていく。

三・一・一 「まさか+N(≡名詞)」形

まず「まさかの+N」形からみてみる。

「まさかの+N」形の全例の中、特に修飾に係っている名詞は二例(「まさかの用心」「まさかの役」)を除き、すべて時(とき)であった。この結果から見ると、「まさかの時(とき)」はひとまとまりの連語のように使われていたことが窺える。名詞との修飾関係をもちつつ、中古にみえた「今の時・現在」というような意から「(予想される)時・時期」というような意味が加わった。

さらに「まさかの時」が置かれる文脈をみると「(予想される)

時・時期」は「現在、あるいは予期しない危急の事態に直面する」という、マイナスイメージが暗示される。次のページにあげる(一三)(一四)は(二五)の『日国』の初出例より少し早いものであり、いずれも「まさかの時」が用いられている。(一三)の「時」は「心に見どころのある、その時」を表す。(一四)の「時」は「鳥にあたらなからには、今、何かにかあたってみましよう」というふうに、「今の時」を表す。

(一三) 心に見所が有ば、**まさかの時**一方を打破らせ、敵はぬ詮には身が馬の先に立て打死させ、あつばれな侍やと、人にも讚めさせ、恩を報じさせふと思ひしに、盗みをかはいて、侍たる身が町人にかやうに打擲に合(あひ)、一分を棄てさせたは、扱も結構な恩の送りやうかな。

『傾城壬生大念仏』(大系・一七〇二年頃)

(一四) 腰ぬけめとしかり給へハ、珍齋、いきのしたより、まつたく鉄砲にてハ御座なく候。あれほどたくさん成(なる)鳥にあたらぬからハ、**まさかの時**、何かにあたりませふとぞんじまして、おせうしさに目がまひましたと申あげた。

『軽口御前男』(大系・一七〇三年頃)

(一五) 『まさかの役にたたず』

『浮世草子・忠孝永代記』(日国・一七〇四年頃)

これと関連して、「まさかの時」が置かれている文の文末タイプをみてみる。(一六)(一七)のような①「断定文」(五例)、(一八)(一九)のような②「否定文」(六例)、(二〇)のような③

「推量文」(二例)に分けられる。

①「断定文」(中止節を含む)

(一六) 心に見所が有ば、**まさかの時**一方を打破らせ、敵はぬ詮には身が馬の先に立て打死させ、あつばれな侍やと、人にも讚めさせ、恩を報じさせふと思ひしに、盗みをかはいて、侍たる身が町人にかやうに打擲に合(あひ)、一分を棄てさせたは、扱も結構な恩の送りやうかな。

『傾城壬生大念仏』(大系・一七〇二年頃)

(一七) 詞「イヤ三浦は人に勝れて。孝行深き者なれば。母が傍に付そはゞ。**まさかの時**に親に引され。未練の心付時は。却て我子が弓矢の名折と。」

『鎌倉三代記』(大系・一七七〇年頃)

②「否定文」(「ない」「ず」等)

(一八) 詞「武士は打囃しせねば叶はぬと心得。武器馬具も代なし。小鼓に金銀をちりばめても。其鼓が**まさかの時**お馬の先(キ)の御用に立ず。遊藝に身を投打(ツ)は町人の業…(省略)」

(一九) 某兼て當主因幡之助殿を無者となし、大江家を押領なさん我大望。家中の諸武士も大半味方に附くといへども、

まさかの時片腕と成るべき者壹人も無し。汝が手練、大丈夫なる魂を見極し故、大江殿へ推擧なせしは味方に招かん我が斗略。『小袖曾我薊色縫』(大系・一八五九年頃)

③「推量文」(「ましよう」)

(二〇) 地「金銀財寶は塵埃。父様や母様の貧な暮しを見た時も。

能(あた)はぬ金がほしいとは夢程も思はずして。今日といふ今日あちらの身請がうらやましく。わしや金がほしう成りました。仕合のよい人を。妬は道で「フシ」なければども。どんな男ぞ顔見てやと。障子の透よりさしのぞき。ヤアありやわしが近附。**まさかの時**は心便りに成りましよう。力を付けてくれた人。」

『博多小女郎波枕』(大系・一七七八年頃)

以上、近世に入って「まさかの+N」形が見られ、さらに特定された名詞を伴って連語のように使われていたことが分かった。これは現代日本語にも引き続き使われているものである。ただし、近代・現代にかけて「まさかの時」を含め、修飾する名詞の範囲がより広がっている。

(二一) 校庭では防災訓練も実施。午後1時に市内で震度6弱の揺れを観測史たという放送が校庭に流れると、児童や住民が校庭に避難。馬場山東自治区会の岩崎克幸さん(69)も地域の住民64人を連れて避難した。「北九州市は地震が少ないけど、**まさかの時**のために備えはしておかないといけない」と自戒していた。

『朝日新聞』二〇一三年三月二日

(二二) 台風で関西空港が冠水し、その2日後には北海道胆振東部地震で、道内ほぼ全域が停電に。**まさかの連続**だった

災害から1カ月。「想定外」とどう向き合うべきか、改めて考えた。『朝日新聞』二〇一八年一〇月四日

三・一・二「まさかに」形

次に「まさか」に助詞「に」がついた「まさかに」形をみている。「まさかに」形は次の二例に留まる。「まさかの+N」形より少し遅れて現れ、先掲した(二三)＝(四)のように断定文、(二四)のように否定文に置かれて見える。

(二三)＝(四) 初瀬路「サアずいぶんむりとはおもひ、せんが、

一トえさんもあのよふにい、すから。」文理「ありやア三年もこふ来たものだから、**まさかに**あいそうぶりだわな。」

よしの「なんでもわたくしどもが、一生のたのざんす。」

『傾城買二筋道』(大系・一七九八年頃)

(二三)の「まさかに」について『新全集』には「当座の」といった語釈があり、「この場合お世辞になりましよう」というふうに解釈される。(二三)の「まさかに」はまだ名詞性が残っていることが分かる。

しかし、(二四)の「まさかに」は「よもやそうもならない」というふうに解釈され、「まさかに」は副詞的なもののように文末の「めへ」と結びついて「そうなる」可能性を否定している。

「まさかに」否定表現」といった呼応関係がみえるものはこの一例に過ぎないが、「まさか」の副詞化の一連の過程の一部分として捉えてもよいだろう。

(二四) ▲「とうがらしが隠居すると、古イせりふもおかしくねへノ」 ●「繩かゝるの否ならば▲」「黄色イものをおめへの名代、金がなけりやアそこいらに●」「おかるもどきの代ものが▲」「ほんにナア、しかし**まさか**にそもなるめへ」 ●「サア代官所へ引ずらうか」ト丹次郎が手をとればおてうはかなしくわけいりて(省略)

『春色梅兒譽美』(大系・一八三二―三三年頃)

三・一・三「まさかゆ」形

「まさかゆ」形は一八〇〇年代以降の資料からみえ始める。さらに「まさかゝ文末表現」といった関係ももち、文末には主に否定や否定推量表現が来る。つまり、陳述性をもつ副詞である。では、「まさかゆ」形を構文別に以下の三つに分けてみる。(例が少ないことから全例をあげる)

I 「**假定条件**、**まさかゝ否定表現**」の構文で、前件に仮定的状況を設定し、後件には前件の仮定的状況が起きても「予想の事態」は起きる可能性はないという意味を表す。左の(二五)―(二七)がこの構文に当てはまる。(二五)は「…と、**まさかゝ**ねへ」(二六)は「…ば、**まさか**ゝならない」(二七)は「…なら、**まさか**ゝめへ」となっている。いずれも前件(あるいは前文)に假定条件節「と・ば・なら」がきて、それを後件の「まさかゝ否定表現」が承ける形式である。

(二五) 北八「そふさ、なるほど着やうといふと、**まさか**さる

ものもねへもんだ」トむちうになりてはなしゆくあとからわうらいのもの「きるもんがなかア、やつぱりそのうしろにおつきな紋所のある、幟の染かへしをきてゐさんすがゑいわいのハ、、、。」

『東海途中膝栗毛』(新全集・一八〇二―一四年頃)

(二六) それだから作者も心付ず前編に書おとして置たも大しきぢりだ。記念とおもへば**まさか**枕紙にもならねへ訳で今もつてかうして持て居やすとはな紙ふくろ(省略)

『花街寿々女』(洒落本大成・一八二六年頃)

(二七) 幸「お目に懸りてへといふ事なら。**まさか**寐られもしめ。蒲焼を貰つたふ運だ。待て居るからそふいつて(省略)」 『同右』

II 「…ど(も)、**まさかゝ否定表現**」の構文で、後件には前件の状況が起きても(予想している状況II)前件に反する結果が現れる。(二八)は「…ども、まさかゝず」、(二九)は「…れど。まさかゝず」である。

(二八) そはくしながら出て行かやうなるおゐらんはとりとめたきやくじんもたくさんくうはきらしく見ゆれども**まさか**かけながしのいる事もできず見かけとはちがひてとんだきせうものなればやり手もとりあつかいの(省略)

『花街寿々女』(洒落本大成・一八二六年頃)

(二九) あんまり口奇麗な事もいはれね訳を知つては居れど。**まさか**親の讒そうもいわれず。あの手代の算六めが折々

真実らしいこは異見も(省略)

『同右』

III 「まさか(で)も、否定推量表現」の構文であり、I・IIと違って、この構文は「まさか」仮定の逆接「ても」が結びつきつつ、それを否定推量が承けている。

(三〇) 一体茶屋への義理で出た事なれば、**【まさか捨ても】**を
かれまい、と来て障子をさらりと明る。

『繁千話』(新全集・洒落本・江戸後期頃)

(三一) 且「さうしていくらだ。」道「さして高金のものでござりませんが、貴君の思召を被仰(おつしやつ)て御覽まし。夫で八千疋ぐらゐでハどうだらう。」道「**【まさか夫でも】**いけますまい。」且「それじゃアもう一両やらうか。」道「まだいけません。」且「夫じやア五両ならよからう。」道「夫でも参りませぬ。」且「はてナ。そんなら思ひきつて、金一枚なら言ぶんあるまい。」

『春色三題噺』初編 (大系・一八六六年頃)

これらの構文は「まさか+N」や「まさかに」形にも似たような文の構造がある。例えば、II「…ど(も)、まさか〜否定表現」に対して、(一九)は「〜ども、まさかの時〜無し」、(二四)の場合は「しかし」といった逆説の接続詞を用い、「しかし、まさか〜ない」という構文が挙げられる。つまり、副詞「まさか」が陳述性をもつようになったのは他用法の影響もある程度あった

とも考えられる。

「まさか」が副詞として現れた、近世期には「まさか」と呼応関係にある文末表現は主として否定・否定推量に絞られていた。以上を踏まえ、表一に近世における「まさか」の形態別の初出時期を示す。

表一 近世における「まさか」の形態別の初出時期

(★は初出時期を表す)

形態別の初出時期	まさかの	まさかに	まさか
一七〇〇〜五〇	(一七〇二年頃)★		
一七五〇〜一八〇〇		(二七九八年頃)★	
一八〇〇年以降			(一八〇二年頃)★

表一から考えると、三つの形態の初出は時間的な差は大きくないが、「まさかの」→「まさかに」→「まさか」といった順に現れた。他の用法より遅れて現れた副詞の「まさか」は次の表二と合わせてみると、近世後期から副詞、特に文末表現と呼応する陳述副詞として確立されていくことが分かる。

三・二 近代期

前節でみたとおり、「まさか」は近世を通して、「まさかの」「まさかに」「まさか」といった三つのものが使われていた。

さて、近代に入ってこれらの形態はどのような様相をみせるか、見ていく。まず、左の表二は雑誌『太陽』や『女学雑誌』を対象にして検索した結果を形態別・年度別に分けてまとめたものである。

表二 近代における形態別・年度別の「まさか」の使用様相^⑤

形態	まさかの	まさかに	まさか	その他
一八九四～九五	一	二	一六	〇
一九〇一～〇九	九	二二	三七	四
一九一七～二五	二	六	五九	八
計	一二	二九	一一二	一一

表二から、「まさかの」「まさかに」は一九〇〇年初を境に減少していき、現代語にまで影響を与えていたことがわかる。その一方「まさか」はますます増加していき、近代から現代にわたって副詞的な性格を強めていった。

● 「まさかの+N」形

名詞の下にくるものは「時」（二〇例）、「場合」（二例）、「用」（一例）であり、依然として「まさかの時」はひとまとまりの語として用いられていた。

(三二) 天下太平になれて武備すたれ、武臣墮落して、まさかの用に立たず。

大町桂月「藤原時平」『太陽』（一九〇一年）

(三三) 其金は安田氏なくとも何處かに存じ居れば、まさかの時にはやはり國家の用を爲すことの出来る筈のものなり。

山路愛山「澁澤男と安田善次郎氏」『太陽』（一九〇九年）

● 「まさかに」形

近世に引き続きみられ、文末に否定や否定推量表現が来る。(三四)は「その標準を示したとしても、よもや罪にあたらないうとと思う」という、「罪にあたる」可能性が低いことを表す。(三五)も同様に「戦争の場では逃げて隠れることはできない」といった意味で、「まさかにくず」の呼応関係により「逃げ隠れる」ということが否定される。

(三四) 其の標準を示しても、まさかに罰も當るまいと思ふ。

長谷川天溪「文藝時評 主観に別るる苦痛」

(三五) 一旦戦場に臨めば、まさかに逃げ隠れもせず、

金城鉄壁生「名士の佛國觀 佛國の陸軍」

『太陽』（一九〇九年）

『太陽』（一九〇九年）

●「まさかゆ」形

副詞の「まさか」は圧倒的に多くみられる中、「まさか」文末表現の呼応関係をもつものに焦点を当ててみる。左の表三は文末表現の種類によって分けたものである。

表三「まさか」と文末表現⁵⁾

文末表現	「ない」	「まい・まじ」	「と思わなかった」系	その他
一八九四～九五	〇	六	一	六
一九〇一～〇九	七	二〇	一	〇
一九一七～二五	二三	二七	二	四
計	二〇	五三	四	一〇

表三をみると、「まい・まじ」といった否定推量表現との呼応関係が多く見える。そして否定表現との呼応関係もある程度みられ、時代とともに現在ののような陳述副詞として定着していったことが分かる。また、想定外の意が含まれる「～と思わなかった」系も、近代初期からみられるようになった。

(三五) たつた一度頭を下げたおけば、**まさか**頭痛もしなかつたらうに。

巖谷小波「ソクラテスの滑稽(続)」『太陽』(二八九五年)

(三六) それでも鐵伯父さんが居りや、**まさか**そんなことをしなけど、

田山花袋「手紙」『太陽』(一九〇九年)

(三七) 僕がいい加減のことを言つてゐるとは**まさか**思はないでせう? 八時半です。

田内長太郎(訳)／アーノルド・ベネット作

「倫敦の火」『都會の獲物』『太陽』(一九二五年)

四 まとめ

本稿で取り上げた現代語の「まさか」は陳述副詞の一つであり、「可能性の低いこと」を表し、「まさか」否定・否定推量との呼応関係をもつ。このような「まさか」はいつから、どのような過程を経て用いられるようになったかについて考察した。この結果から、次のような点が明らかになった。

《古代～中世》

『万葉集』から名詞性をもつ「まさか」が万葉仮名表記で初出した。中世にはない。

《近世》

「まさかの」「まさかに」「まさかゆ」といった形態が現れる。

当初は名詞的なものが多かったが、近世後期から副詞的にも用いられるようになる。少なからず文末表現との呼応関係もみせる。

《近代》

最も盛んになった時期であり、近世の「まさか」に引き続き「まさかの」「まさかに」「まさかゆ」の形態が用いられる。しかしその中でも副詞性が強い「まさかゆ」が最も多くみられる。文末との呼応関係においても否定・否定推量表現と安定的に呼応関係をもつ。

以上、「まさか」をめぐる歴史的に考察してみた。しかし、今回の研究では研究資料が少なかつたことから「まさか」の流れを触れただけであった。より詳細な分析・考察は今後の課題としたい。さらに今後は今回の研究を踏まえ、「まさか」と類義関係にある「よもや」についても考察したい。

注

- (1) 表二を参照。
- (2) 「朝日新聞」データベースを用いて、二〇一八年一月月上旬から一〇ヵ月分を対象に「まさかの」を検索した結果、全六二件であり、そのうち「まさかの時」は一件しか見当たらなかった。
- (3) 表二の「その他」には「まさかゆ」形であるが、感動詞的なものである。この用法は今回の研究対象ではないということから、取り除くことにする。
- (4) 「朝日新聞」データベースを用いて、二〇一八年一月月上旬から一〇ヵ月分を対象に「まさかの」を検索した結果、全六二件のうち「まさかに」は一件しか見当たらなかった。「まさ

かに備え」(二〇一八年九月二八日)

(5) 表三の「その他」には意志等を表す「へき・べし」といった文末表現や、「まさか」で文が終わるものが含まれている。

【参考文献】

- 『テキスト類・コーパス類』(詳細な作品名は省略する)
 - 『新編日本古典文学全集』小学館
 - 『日本古典文学大系』岩波書店
 - 『朝日新聞』データベース 朝日新聞社
 - 『新編日本古典文学全集』データベース 小学館
 - 『日本古典文学大系』データベース 国立国語研究所
 - 『歴史コーパス』国立国語研究所
 - 『CD-ROM版 太陽コーパス 雑誌『太陽』データベース』国立国語研究所
 - 『CD-ROM版 太陽コーパス 雑誌『女学雑誌』データベース』国立国語研究所
- (い) じうん ソウル女子大学非常勤講師